

# Language, Blood and Milk : L'Ecriture and the Body in Beloved

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/983">http://hdl.handle.net/2297/983</a>

## 言語、血、ミルク--*Beloved* におけるエクリチュールと身体性(I)

和 泉 邦 子

私が見ていたのは、肉の、つまり、性的快楽（ジュイサンス）の極みにいる女性、遂に解放された、明白な力でした。...私があふれ出ます！私の胸があふれ出ます。母乳が。インクが。授乳の時間です。それで、この私はですって？私も空腹です。母乳の味のインク。書くこと。快楽を享受したい、自分が満たされていると感じたい、いきみたい、私の筋肉の力と私の調和とを感じとりたい、妊娠していると同時に出産分娩の喜びを、自分に与えたいと、私がなおいっそう望んでいるかのようにと書くこと。...以上が、なぜ、どのように、誰を、何を、私が書かかなのです。つまり、乳です。... (中略) 私たち女性が、文化の統制から無縁（ソヴァージュ）で、人の存在がいっぱいに含まれているテキストを、打算なしに書くためには、私たち女性の [羊] 水が流れ出すだけで十分ではないでしょうか？<sup>1</sup>

しかしながら、フライデイの本当の問題はオオムのように模倣して、簡単に言語を学べなかったことではなく、内面化することを学んだことである。...彼が（ご主人様、はい、いいえ）以上の英語を知らないうちは、彼自身の言語で考え、熟考し、彼の母国語で刺激や現象を説明すると推測しなければならないのであるが、クルーソーの説明はそうはならず、彼が救ってあげる前に、フライデイは言語を持たず、持っていたとしてもそこに言うべきことは何もないということになる。<sup>2</sup>

知はいかにして侵略と征服から、啓示と自由な選択に変貌するのか。<sup>3</sup>  
(下線部筆者。以下、本文及び注の下線部は全て筆者。)

*The Scarlet Letter* における Hester Prynne の胸に縫いつけられた緋色の A の文字が、厳格なピューリタニズムの家父長制社会において、純潔、貞淑な妻の境界領域を侵犯した罪のレットルとして貼られる記号であるとすれ

ば、*Beloved* においては、妻の貞淑への絶対要請が同じ罪の記号として機能するどころか、その七文字は母親 Sethe の身体と交換に、いわば女の肉体を商品化して刻印されるエクリチュールの反復的システムを暗示させる。ヘスターの罪があくまでも夫の所有物であるべき妻の身体性の純潔を問題にしているとすれば、ピンク地に細く光る斑点が一面に散っていた墓石に刻み込まれる *Beloved* の七文字は純潔(血)のルールを問題視するような種類ではない女の中の差異を浮き彫りにしつつ、「セスの指を油のように浸した赤ん坊の血糊よりも鮮明で、一生の時間よりも長く感じられた十分間<sup>4</sup>」と交換に産出される。赤ん坊の血を思い浮かべ、石工の欲望のはけ口として母の身体と引き替えに産出された文字が、母の性的快楽を解放する力としてイメージされていないことだけは明確である。

家父長制文化において、ペンを取るという創造性を許されてきたのはペン=ペニスを持った男であり、女のセクシュアリティはそのペンの受け皿としての空白のページにすぎないとこの比喩によって女と書くことのはらむ問題性が問われて以来<sup>5</sup>、フェミニズム批評の一派は男の欲望の対象物に甘んじてきた女の歴史と神話の壁を取り払うべく、イリガライによる「二つの唇<sup>6</sup>」、シクスーによる「ミルクで書く」などの隠喩を多用しながら、女が自らの欲望の主体の座を奪い返そうと、エクリチュール・フェミニンの理論化を目指してきた。しかし、たとえ比喩にしても、女の「肉体を書く<sup>7</sup>」という言い方で解放を目指す女の言語(象徴秩序=父の法の外側)が示されたかということ、女性の身体性を本質化(essentializing)するメタファーは、白人フェミニストが解放の場として定義し直そうとした機能と同時に、女の肉体こそが、もう一度抑圧の契機として再刻印される場になりうるという危険を見落としている。母の身体性が男が持たない生殖能力あるいは子供との「潜在的な関係」を指し示すものである一方で、全ての女の持つ潜在能力を、男の支配下に置くことを保証するための母性愛イデオロギー装置を作動させる場にもなりえるという二面性は、既に多くの白人フェミニストたちが指摘している。

例えば、Susan Rubin Suleiman は、一人前の人間になっていくプロセスを本質的に子供のドラマとしてきた精神分析は、母の悲劇が、母であることとは関係のない母の側の自己実現の欲望と子供への無私の献身とが葛藤を引き起こさざるを得なくなることにありと指摘し、「母は書くのではなく、書かれるのである」と述べている。<sup>8</sup>白人フェミニストの間でも問題視された母の自我と子供との関わりを、さらに女の中の人種的差異の問題を考慮に入れるとき、例えば、モリソンの用いる言語をエクリチュール・フェミニンによる女の解

放を唱うフランス系フェミニズの理論との類似を援用して、Female speech, as Morrison renders it, is equivalent to what Cixous calls the “eternal essence,” that feminine equality of bringing language down to earth and making it “playful.”<sup>9</sup>と述べるBarbara Hill Rigneyなどが試みる理論化は、その有効性と限界において捉え返されねばならないであろう。

Hazel V. Carbyは、奴隷制の経済的、政治的、社会的システムを維持していく上で、エリート・プランテーション主が、是が非でも掌握しなければならなかった絶対的権力の結び目に全ての女の再生産能力へのコントロールがあったこと。しかし女の再生産能力の掌握の仕方は、白人女性と黒人女性では全く異なる結果をともなったのであり、一方の極では‘true womanhood’のイデオロギーによる強烈な拘束力が浸透していくのに対し、黒人女性の再生産能力は、全ての奴隷を母親の社会的身分で位置づけるという方程式によって、奴隷主の資本蓄積に直接貢献する道具にすぎなかったこと、白人女性の間では制度的にレイプの犠牲者になり続ける黒人女性の実態は無視され、当時女性読者層で人気を博した家庭小説に典型的な価値観の物差しは、性的暴力を受けるよりも死を選ぶヒロイン像を真の女性性体現者として好ませたことを指摘している。<sup>10</sup>またSander Gilmanは、奴隷制の是非が物議を醸し出す19世紀初期の歴史的状況の中で、黒人女性のセクシュアリティがいかにか白人女性と全く正反対の属性を持つ珍しい動物として科学的、解剖学的に定義されるようになっていったかを説明している。「白人女性のセクシュアリティ＝純潔／黒人女性＝淫乱」を道徳的、文化的属性とする基本的な二項対立図式は、南アフリカ出身のサラ・バートマンをホッテントット・ヴィーナスとして、その巨大な尻を博物館に陳列し、さらし者にするすることで、科学的人種差別を正当化する有効な論拠を構築することになった。着目すべきは、医学、科学が時代のディスコースの新たな権威を獲得する風潮の中で、白人女性／黒人女性のセクシュアリティが定義されていくその差異である。<sup>11</sup>

家父長制的奴隷制維持のために賦与されたイデオロギーの異なる効果が、白人女性、黒人女性に向けていかに作用していたのかを考慮すると、白人女性が欲望の主体としてその身体性を刻印することを目論むエクリチュールの場は、特に黒人女性にとって、むしろ人種・ジェンダー・階級的差異を跨る力関係の価値観が反復的に刻み込まれる契機になりがちであることに細心の注意が払われねばならない。ヘスター・プリンの身体とセスの身体は、同じ女でも異なった扱いをされているのであり、女の中の差異を歴史的、社会的、文化的コンテクストに基づいて具体的に考慮されえない理論化は、女を一元

化してコントロールしようとするジェンダー・イデオロギーの発話の内部で作用する人種差別のディスコースを（黒人を一元化して支配しようとする発話の内部で作用する性差別のディスコースについてと同様）不可視にしてしまうのではないかという危惧を残す。歴史的、社会的、文化的に、黒人女性の子宮は、白人女性が好んで用いた解放の場としての隠喩どころか、白人男性の欲望のはけ口であると同時に白人男性の私有財産を再生産するために都合良く使用された道具であり続けたし、黒人男性との関係においても人種的忠誠の名の下に、今日に至っても、黒人女性の身体性が解放のエクリチュールとして機能することを阻む力が作用する場であり続けている。<sup>12</sup>このような問題は、『ピラヴィド』解釈においても解決されずに反復され続けているのではないかと危惧される。

例えば、Deborah Ayer Sitterは、ポールDがセスのもとを離れていくのは、ポールDが理想とする男性性がセスというあまりにも気丈で頑固な女性性を体現する女によって脅かされたからであるとしているが、<sup>13</sup>黒人女性が置かれていた社会的、文化的コンテクストに十分な注意が払われなくて、個人的資質に還元されてしまっているとの批判を免れ得まい。このような読みは1965年にDaniel Moyhahanらによって偽造された黒人女性に対するステレオタイプである“big house”における“the Black Mammy”のイメージが反復的に読み込まれているにすぎない。<sup>14</sup>モイニハンは、「黒人コミュニティは他のアメリカ社会とは異なり、グループ全体の進歩を遅滞させる母系制構造を強いられている」から黒人家庭とコミュニティ全体に男性の権威を導入すべきであると結論を下し、その結論の是非をめぐる論議が巻き起こった。<sup>15</sup>白人女性に与えられた‘true womanhood’のジェンダーイデオロギーが人種的イデオロギーと錯綜して捻れて曲解されたときに、黒人家庭はむしろ母系制であるとの新たな誤読が生まれたのであるが、『ピラヴィド』において問い直されているのは、そのような錯綜したイデオロギー作用がいかにかに母の身体性の差異において書き込まれているのか、その問題の所在を明確にすることであろう。

モリソンは黒人として、女として、母として、いかに書くかという問題意識を鮮明に持っている作家であり、<sup>16</sup>彼女が、人種・ジェンダー・階級への周到な自意識を持って取り組んでいる言語の問題は、御主人であるCrusoeの言語を内面化しなければならなかったFridayのディレンマに例えられたり、*Playing in the Dark*, “Unspeakable Things Unspoken”などのエッセイや評論の類における修辭的な言い回しにおいて、その問題意識を展開したり

しているが、被抑圧民族の代表としての語り部、その中でさらに二重に隠蔽されてきた女の語り部としての役割を、どのように果たすのかという今日的要請を反映させた重要課題であると言ってよいであろう。主人の言語体系によって枠づけられてしまっている価値観の内側にいながらにして、その枠組みの外側を言及していくような語りの可能性はあるのであろうか？本論は、この課題を紐解く作業の第一段階として、(1) 言語秩序と家庭秩序--スイートホームの位置づけ(2)-1 黒人男性の性の女性化--ハーレの物語(2)-2 失われた男性性の再所有の欲望--ポールDの物語について考察してみたい。

(1)

モリソンの最初の作品*The Bluest Eye*の冒頭が、小学校の教科書に使用される典型的な文章を三種類の文体にして示したものであることはよく知られている。そこで描かれているのは、ジェンダー役割を守った強い父、優しい母、その両親に見守られたDickとJaneという二人の子ども、犬・猫のペットによって構成される模範的な核家族の幸福像である。しかし、この幸福な核家族像は句読点が抜け落ち、大文字と小文字の区別がなくなり、スペースもはずれて、言語秩序が崩壊していくにつれ最後には判読不能となる。この三種類の文体が、物語の中で各々、フィッシャー家、マックティア家、ブリードラヴ家を象徴し、その順序で秩序から無秩序に向かって対応するよう描かれているということは、既に多くの批評家によって指摘されている。<sup>17</sup>しかしながら、家庭秩序の崩壊を言語体系モデルの破壊、判読不可能性として提示したこの枠組みは、秩序とされる白人中産階級男性の価値観の一元化作用自体が、いかにその枠組の外側にはみ出すものをゆがませ排除してしまう破壊力を持つかを逆説的に示すために用いられているものである。そこで問い直されているものは、そのような秩序を標準として強いる一元的物差し自体ということになる。物語の展開は白人中産階級男性の価値観を内面化して、中産階級化していくことを社会的身分向上の唯一の基準とし、被抑圧の歴史を過去のものとして忘却し始めた黒人コミュニティへの批判的警鐘を機軸としている。人種・ジェンダー・階級の差異をどのように位置づけるかという問題と言語によるリプレゼンテーションの問題が、モリソンのデビュー作からの前提にあり、しかもその言語秩序と家庭秩序がパラレルな関係を保有する枠組みの中核として据えられていることに着目すべきであろう。

モリソンは、インタビューで小説という表現形式について、次のように答えている。

産業革命の初期に中産階級は、旧式の肖像はこの新興階級のために役立たなかったために自らの肖像を必要とした。小説はそのときこの機能に役立ったし、今でも役立っている。小説は、都市の価値について都会的価値について語る。いまや私たちの民族、我々「小作人」が都市にやってきて、その価値観とともに生きている。古い部族の価値観と都会的価値観の対立が存在する。…音楽が我々に活気を保持させてくれたが、もはや十分ではない。我々の民族は喰い尽くされている…そんなわけで、私は自分の本が誰かから‘詩的’と呼ばれたくない。なぜなら、詩的とは贅沢で豊かな含意を持つからである。私は黒人がその元来の力を語るような言語を回復したい。それは、豊かであるが華麗ではない言語を要請する。<sup>18</sup>

『青い目がほしい』の中でモリソンが主張しようとしていることとの関連で言い換えると、小説形式とは特定の時期の特定のグループの要請する価値観を一元的に再生産するためのイデオロギー装置であったこと。標準化作用とは白人中産階級男性の利益を中心に作られた認識の枠組みのモデルに従って一人前の個人、良識ある市民という肖像をコピーしていくように模倣することで、一人前の個人になっていく、あるいは同化していくように促すプロセスのことであること。そのような個人とはそもそも西欧的個人主義の中産階級的価値観の枠組みの内部で描かれる自画像であるとすれば、非西欧としていつも既に近代の進歩に乗り遅れた‘not quite / not white’<sup>19</sup>として位置づけられてしまう他者は、その肖像画が枠づける認識構造からは不可視のものになってきたこと。そのような中産階級的価値観に基づいた自画像を描き出すために作り出された形式である小説言語がもともとはらまざるを得ない限界に対して注意が払われなければならないこと。ある時期まで黒人の表現様式として機能した音楽のモードが物象化されてしまったために、現在新たな様式の小説が民族的要請を満たすために必要となっていることを指摘し、その要請に答え得るような言語表象の問題はモリソンが小説を書く際の原点にあることなどが訴えられていると考えられる。ここでは、直接的にジェンダーについては触れていないものの、言語秩序と家庭秩序をパラレルに並べて認識の枠組みとその限界を指し示す『青い目がほしい』の書き方などを考慮に入れると、ジェンダーの問題も内包されていると考えてよいであろう。第一作でモリソンが黒人として女として書くことがはらむ問題として提示したことは、この人種・ジェンダー・階級の一元的標準を枠づける基準として

の標準言語の内包する問題であった。差異を排除する標準言語の枠組みは、文化における他者に主人の価値観を内面化させることを強いる。ペコーラを待ち受けていた悲劇は、その価値観の枠組みを無批判に受け入れることが、その外部に位置づけられるものにいかに破壊的に作用するかを示している。

このような枠組みが内包する問題提示が『ピラヴィド』におけるスイートホームの位置づけを考察する上でも重要であろう。スイートホームと皮肉に名付けられたプランテーションで奴隷を「一人前の男」になるように育てたガーナー氏の温情主義は、個人のレベルではもちろん白人が皆、冷酷、残忍であった訳ではないことを他のプランテーションや、彼の死後、実権を掌握することになる「先生」との比較で浮き彫りにしているが、一方で奴隷制を擁護するための論理、つまりプランテーション自体を大きな家族主義的統治 (paternalism) で括られるイデオロギーでからめ取る装置として機能したことも否定できまい。奴隷主の持つ「一人前の人間」という自画像を枠づける価値観は、スイートホーム農園においてガーナー氏に育てられた四人の男たちによって (たぶんシックソウを除いて) かなりの部分まで引き継がれていたと考えられる。その中でも奴隷制下、まれにみる「結婚」らしきまねごとを許されたハーレとセスは、一夫一婦制の結婚、夫を家族の長とする家父長制的家庭観の枠組み、その家庭像が理想とする男性性、女性性を遵守すること、私有財産と所有権の概念など、白人たちの枠組みによって一元化されている価値観を内面化して、行儀よくふるまうことを習得していった模範生である。ベビー・サッグスに代わって若い女が現れたときにも、セスがハーレを夫として選ぶ一年間、自分の欲望のはけ口を子牛で我慢したスイートホームの男たちには、「文明人／野蛮人」「人間／動物」の境界線を分ける一人前の男としての誇りと自負がある。しかし、このような「一人前の男」としての誇りと自負を植えつけたガーナー夫妻の奴隷制度運営方法は、孝行息子によって自由を買い取ってもらったベビー・サッグスによって、「ガーナー氏は、世界がおもしろおかしく遊べる玩具か何かのように、ふるまった(139, 下, 14)」と後になって疑問視されるものである。他のプランテーションとは比べものにならないくらい待遇は良かったが、それでも「ある種の危険を招くような彼 (ガーナー氏) のやり方」だったし、また彼はそれを百も承知していた。事実、自分がいっしょでない限りスイートホーム農園の外に出てはならぬという彼の命令は、奴隷の一人歩きを禁じている法律を守るためというよりは、「一人前の男として育てられた奴隷が野放しになった際の危険を考えてのことだった。(140-141, 下, 17)」と記される。ガーナー氏が経営するような

奴隷制は、真の権威者である主人の力量内という限定つきで奴隷を玩具のように遊ばせる采配をふるった効果としてもたらされてもので、その効果がスイートホームの男たちに「一人前の男」であるかのような錯覚を起こさせたとはい換えた方がよい。主人の管理・監督の行き渡らない範囲に出ることの禁止は、白人の監督下において教化(civilize)しなければ、黒人たちは野生(nature)に戻ってしまうとの認識を前提としており、そのような認識が内包する暴力は、ガーナー氏が経営する類のプランテーションにおいても例外ではなかったと言わねばならない。むしろ表面上の温情主義が奴隷制度それ自体の暴力性を隠蔽する仮面として作用したという点で、より問題性をはらむとみなされた方がよいであろう。歴史的にも、奴隷制擁護派の科学的人種差別論が差別の根拠としていた原理は、西欧文化の管理、監視の下で初めて、黒人たちは野蛮人から文明化された人間に教化されるのであって、いったん野放しにした途端に黒人たちは動物的本能をむき出しにして、野生に戻ってしまうという西欧文化優位に対する揺るぎない「論理」にあったのであり、ガーナー氏のスイートホームは、あくまでも主人の価値観をなぞらえて「一人前の男」の自画像を描くように奴隷を教化、あるいは文明化するというイデオロギー装置の枠内にしかない。

スイートホームの温情主義をFrederick Douglassの自伝と比較することも有効かもしれない。ダグラスは、自伝の中であらゆる奴隷所有者の中でも信仰深い宗教的主人の奴隷になることは、「黒んぼ調教士」<sup>20</sup>に飼い慣らされる危機という点で最悪であると述べ、キリスト教伝道の使命それ自体が白人優位性を当然の前提とする人種差別的な観点を内包するものであることを指摘する。彼の視点からすれば、「南部の宗教は、最も恐ろしい犯罪に対する単なる覆いであり-- 最も暗く、最も邪悪で、最もはなはだしい残虐さを正当化するもの-- 最も邪悪で、最もはなはだしく、最もひどい奴隷所有者の行為が、一番安全に保護される暗い避難所」にすぎないとして、宗教が奴隷制の内包する暴力を覆い隠す機能を果たす装置であると糾弾する。ダグラスは奴隷制が覆い隠している暴力に自らの力で気づき、希望のない束縛よりは死を望み、奴隷主であるコウヴィ氏の喉に死を覚悟で抵抗する戦いが必要であるとの認識に辿りつくのであるが、そのダグラスの自伝と比較して気になることは、スイートホームの温情主義で訓練された奴隷たちの逃亡という反抗形式が、優しいガーナー氏から冷酷な「先生」へと主人が交代するという外側からたまたま起こった不運によって引き起こされたと把握されている点である。ガーナー氏の人柄を個人レベルで計ろうとする認識は、システムとしての奴

隷制度それ自体がいかに認識的暴力を内包しているかという問題性に対しては盲目なままであって、主人から奴隷へと教え込まれ、模倣された価値観それ自体を問い直す作業をスイートホームの奴隷たちは経ていない。

スイートホームの男たちが奴隷主の傘下、一人前の「男」として訓練されたとすれば、その男性性と対をなす女性性の価値観をセス自身、分け持っていたと考えられる。六人の異なる父親から、八人の子どもを産み分けたハーレの母のベビー・サッグス、白人にはらまされて出来た子供はセスを除いて皆、海に投げ捨てたセスの母親、白人の父と息子の両方の慰み者とされてミルクを与えることを拒否し、五日後に子供を死なせたエラなど、結果として白人男性の私有財産を累積するのに貢献したり、欲望のはけ口として利用されることになる黒人の母の身体性の方が奴隷制下における一般的な運命だったのであり、当時の奴隷たちには、稀である「結婚」のような形式を許され、生まれてきた四人が皆、夫ハーレとの子供たちであることが確認できたセスの六年間の幸せな家庭像の真似事が、セスに‘true womanhood’の延長線上にあって、母性愛イデオロギーとして一貫して捉えられる女性像を一定程度、内面化させる効果をもたらしたのではないかどうか問われるところであろう。

セスがスイートホームに来る前の記憶は、セスの母親とナンが使っていた言語の忘却とともに失われてしまう。

それからこの女は周囲とは違った言葉を使った。当時はセスも理解できたが、いまでは思い出すことも、繰り返し言うこともできなくなっていた。歌っている場面や踊っている場面、それから大勢の人がいたことを除くと、スイートホーム農園に来る以前の記憶があまりにも少ないのは、この異なった言葉のせいに違いないと、セスは信じた。ナンが教えてくれたことは、ナンがそれを話すのに使った言語とともに忘れてしまったのだ。母親が喋っていたのと同じ言語なのだが、どうしても蘇ってこないのだ。でも、それが伝えようとしていた本質--その時感じとり、それから心から消えることのなかった本質は忘れていなかった。(62, 上, 122-123)

主人の言語の法によって梓づけられた価値観がスイートホームを支配しているとすれば、白人にはらませられた子供はみんな、名前もつけずに海に捨て、黒い肌をした男の名前だけはつけたセスの母の行為と、娘への罪の償いに母の肉体と引き替えに Beloved の名前を生み出したセスの行為は際立つ

た対照を成す。セスの母が支配者の言語を拒否したのに対し、セスは母親が喋っていた言語を忘れて‘Beloved’の文字を身体を引き替えに買う。そこで生み出されたピラヴィドの名前は、葬式の時に牧師が使った言葉を模倣して刻まれた文字であり「皮膚のないユウレイが、あたいの中に指を入れて、暗いところじゃ、イトシイ子って言い、明るいところじゃ、バイタって言ったんだ。(241,下,206)」と説明される白人の都合で使われる論理によって閉じこめられる牢獄であることに對し、セスはどこまでも無意識である。奴隷主の名前に基づいて「正札」や「譲渡証」に書かれていたJenny Whitlowと呼ばれることを拒否したベビー・サグスの母性が、八番目の末っ子ハーレを除いては、七人の子供たちの特徴を確認する間もなくばらばらにされていく運命に對する諦念で象徴されるとすれば、スイートホームでセスに許された結婚の真事事は彼女の心に自分の子供たちという所有意識を植えつける。

Carole Boyce Daviesはこの母性愛の特徴について、“Sethe’s persistent desire is to bring *her* milk to her children.” (イタリックス, Davies)<sup>21</sup>と説明しているが、一夫一婦制の核家族のモデルが成り立たないコンテクストに置かれてきた奴隷女は、母として我が子にミルクを与えることも許されず野良作業を強制されたことが一般的であったことを考慮に入れるとセスに与えられた例外的な措置が彼女に植えた濃すぎる愛の特徴が明確になろう。セス自身は「授乳を仕事にしている別の女のお乳(60,上,120)」を吸って育ったのであり、「前かがみになって働くおおぜいの中の一人」としてしか自分の母の記憶がない。「互いに区別もつけず‘マーム’と呼び合っていた世界」は、核家族的なモデルよりも大きな集団的互助精神によって支えられていることを暗示するものである。しかし、スイートホームは別の智恵で動くかもしれない世界の記憶をセスから奪ってしまう。首を吊るされて死んだ母の胸の下の印も確認できず、母が使っていた言語が象徴する文化が見失われて、支配者の言語である英語に對しては片言なまま、その後のセスは、心優しき女主人ガーナー夫人の忠実な召使いとなるのである。病弱な女主人の世話役であったことが、逃亡を企てた際、セスに遅れを取らせ、鞭打たれ、ミルクを盗まれる出来事を誘発していることも見逃せまい。自分の母ではない女のミルクで育った経緯をすっかり忘却して、自分の子供にミルクを届けることに取り憑かれているセスは、どこかで核家族的な母性愛イデオロギーを背負い込んでいる。この忘却はセスの母親とナンが使っていた母国語で象徴されるような別の文化的価値の喪失として示される。スイートホームで営まれている奴隷制度は、語るに足る言語も文化価値を持たないために、支配者の言

語、資本主義の経済原理、西欧文化の道徳的、倫理的価値観を習得させて「人間」らしい振る舞いを教え込むことこそが白人としての「使命」であるとの認識を共有している点で、他のプランテーションとの差異にもかかわらず、五十歩百歩の違いしかない。その温情主義は、御主人クルーソーの言語によって名をつけられたフライデイのディレンマを隠蔽してしまうことに着目すると、奴隷たちに与える影響の精神的破壊力の大きさの方が指摘されるべきであろう。この農園の奴隷たちは、たぶん野人シクソーを除いて、飼いや慣らされ、支配者の価値を内面化させることによって、スイートホーム以前に持っていたはずの何かを忘却してしまうのであるが、全てを忘れ去るのではなく、わずかに音楽や躍りとして記憶の隅に繋ぎ止められている。

## (2)-1

『青い目がほしい』において父親チョリーが自分の娘のペコーラを犯す悲劇は、チョリーの性体験の原点に加えられた暴力によってトラウマと化し、そのトラウマ体験によって形成された痕跡が後のストーリー展開に反復されることから生ずる。次の場面が白人優位社会において、典型的に刻印される黒人男性の性的原体験を記している。

まだひどく若かった頃、チョリーはある茂みのなかで、小さな田舎娘からはじめてであったが熱心にセックスの喜びを引き出していた最中、二人の白人の男に驚かされたことがある。男たちは、彼の真うしろから懐中電灯の光りを浴びせた。彼はぎくっとして中止した。男たちはくすくす笑った。懐中電灯の光りは動かない。「やれよ」と彼らは言った。「続けてすませしまえ。それから、黒んぼ、うまくやれよな」懐中電灯は動かなかった。どういうわけか、チョリーは白人の男たちを憎みはしなかった。だが、相手の娘を憎み、軽蔑した。<sup>22</sup>

二人の白人の持つフラッシュライトに照らし出される中で、強要された性行為は、彼の性的快楽を表出させるかわりに、憎しみと軽蔑感を生みだし、しかもその否定的感情は、白人男性に対して持ち得ない自らの力のなさの裏返しとして、自分よりもさらに力を持たない者、すなわち黒人女性へとねじれた形で投影されることになる。モリソン自身、この場面を黒人男性の性の女性化(feminization)と位置づけているが、<sup>23</sup>男女の性関係が純粋な愛の行為になることを妨げ、力を持つ者と持たざる者の関係へと還元してしまうかも

しれない歴史的、社会的、文化的コンテクストが刻印される契機となる原体験が象徴的に描かれていると言えよう。『青い目がほしい』における黒人男性の性の女性化の場面は、『ビラヴィド』においてセスに加えられた性的暴力とその場面を見ていた夫ハーレの反応が黒人男性の無力感を典型的に描いているという点で、パラレルな関係にある。ただし『ビラヴィド』における場面は、黒人女性の身体性において直接的に行使される力の関係性と同時に、間接的にエクリチュールの中にはらまれる力、リプリゼンテーションのはらむ問題性が暗示されていることに着目されるべきであろう。セスに加えられた肉体的暴力は、ミルクを盗む白人男性、ミルクを盗む行為を監視し、その盗んだミルクというインクで出来事を記す先生、盗まれているミルクを観察しながら、ミルクが固まったり精製して作られた‘butter,’や‘clabber’を顔に塗りたくる夫ハーレを書き刻んでいく凶柄として、身体性と言語表象がはらむ力関係の象徴性が刻印される。

わたしの脳は、苔の生えたような歯をした二人の若僧のことで、むかむかするほどいっばいだ。一人はわたしの乳を吸い、もう一人はわたしを抑えつけ、本が読める二人の先生が観察して書きとめている。いまでも、あの光景で頭がいっばいだ。アア、イヤダ。あの場面に戻って、これ以上つけ足すなんてできっこない。あの場面に自分の夫を加えるなんて。あの人は、わたしの上の干し草置場から、じっと見ている一すぐそばに隠れていたんだわーあそこだけは誰も捜しにこないと思って。わたしが自分じゃ何も見えない光景を、あの人は見下ろしていた。しかも奴らを止めないで一手をつかねて、見てるだけだった。...夫が攪乳器のそばでしゃがんでいるのも見える。奴らが盗んだ乳のことが頭から離れないものだから、固まった牛乳とバターをいっしょにして顔じゅう塗りたくってる。 (70, 上, 137)

ここで、セスのミルクを盗む甥の行為を指揮し、鼓舞するかのよう監視していた先生は、同時にノートに何かを記述するというエクリチュールの場面を並置しながら描写されている。白人フェミニストが「ミルクで書く」と唱じたエクリチュール・フェミニンのメタファーは、セスに加えられた肉体的暴力の強烈な場面描写とともに、黒人女が創り出す「白いインク」を盗む先生の記述によって、二度暴力的搾取が起こる場のメタファーへと転回する。この場に描き出される二度目の暴力的作用とは、黒人女の肉体から産出されるミルクが、一番の被害者である黒人女のものとして書く手段になりえず、

そのインクが先生の「事実」しか記述しないことに象徴される言語的、文化的、認識的レベルの暴力であると言える。白人フェミニストは、レイプの被害者が沈黙を強いられるのは、事件を口に出すことで、身体に加えられる一次的暴力に加えて、新聞、警察、裁判所など男性中心論理で動く言説の二次的攻撃に晒される危険を犯すことになるからであると指摘した。<sup>24</sup>問題が黒人女の身体性に移行されているこの場面で強調されるべきは、セスのミルクを作る身体は書くことの主体とはなり得ず、エクリチュールと身体の両次元において戯れる‘play’のは、あくまでも、力を持った「先生」であり「その甥」であるという現実とともに、この場面の目撃者として夫のハーレを付け加えることによって、黒人男性の性の女性化が象徴的に描き込まれることである。チョリーの性の初体験が二人の白人男性を見ることの主体とし、黒人ペアが懐中電灯で照らし出される光りの下で欲望発露の主体であるかのような演技を強いられ、実際には、見られる客体に成り下がったとの憤慨が、黒人男性のトラウマ体験を形成するように、この場面の目撃者が受けた致命傷はスイートホームの模範生ハーレの精神を破壊する。ガーナー氏の教えを最も忠実に引き継いだ「一人前の男」を体現していた孝行息子が主人の交代によって直面した現実には、ガーナー氏の庇護の下でのみ通用するスイートホームの「一人前の男」の仮面をはぎ取った時に必然的に露呈される黒人男の社会的無力さである。

この事件は「甥たちがセスを弄んでいるかたわらで、彼女が作ったミルクでそれを記録している先生(98,上,191)」として身体性とエクリチュールとの両次元を並置させながらテキスト中に繰り返される。黒人男性と黒人女性の関係性においてこの「ミルク」と「バター」の喚起する反復的イメージが指し示す比喩は、白人男性の持つ力によって、黒人男性にも刻印されることになる被抑圧の契機、トマウマとして痕跡を残すことになる契機を、同時に描きこむ。チョリーの場合と同様、この図柄‘picture’に浮き彫りにされる権力関係のヒエラルキーとは、奴隷の肉体を扱う裁量の全ては所有権の持ち主にあるのであって、「結婚」らしきまねごとが許されていた夫のハーレに妻の肉体に対する所有権はないということである。妻の身体性に対する所有権が剥奪されていることを目撃こそが、黒人男性の力のなさを刻み込む象徴的出来事としてハーレを狂気へと追いやってしまう契機である。監督者には真の権威のありかを、行為者には欲望のはけ口を、手をつかねて目撃する者には去勢された男性性としての無力感を指し示しながら、この権力の構図の最底辺にいる黒人女が負った真の苦しみは理解されるどころか、権力ゲームの中で棄

却され、沈黙させられる。夫のハーレが搔乳器のそばに座り込んで、ミルクが固まって出来たバターを顔に塗りたくるジェスチャーは、直接的には黒人女性の肉体に加えられた暴力が、間接的には、白人男性であれば所有しているはずの妻の肉体に対する所有権喪失として黒人男性を女性化する原体験を刻印するものである。顔に塗りたくるバターは、この男性性喪失の原体験として、自らに加えられた被抑圧体験として、直接的な被抑圧者である黒人女性の物語を忘却して、凝固していつてしまうトラウマ的体験の比喩ともいえよう。白人男性と黒人男性の対応の差異を比較すると、力を持つ者と持たざる者の幾重にも絡まった関係性がまさに社会的最弱者である黒人女性の肉体において表出することがわかるであろう。「先生」のノートに記述される「事実」は、多くが読み書き能力さえ持たなかった奴隷たちの物語をいつも既に、消去してしまったかもしれない後ちのマスター・ナラティブとして表出する。

リグニーは、この場面について「奴隷制の極悪な罪の中には、その犠牲者を沈黙させるという事態があった。いかによこしまで皮肉であるかを示すこととして「先生」は読み書き能力を教えに来たのではなく、黒人の頭蓋骨を計測する学問のため、記録を取りに来ているということがある。さらに皮肉なことは、先生のノートは、彼女自身は機能的に読み書き能力を持たないセスが作ったインクで書かれているという事実である。」<sup>25</sup>とコメントしている。頭蓋骨を計測する学問が、当時新たな権威を獲得した西欧文明の粹としての骨相学などの「科学的」知識体系であるとすれば、「先生」のノートに記述される「事実」は、セスが作ったミルクを奪って、その盗んだインクによって科学的人種差別のディスコースを記述していく。黒人女の身体は搾取されることで、奴隷主の富を増やしていくことに貢献する一方で、奪われたインクで記述された御主人の言語は、真の犠牲者を理解不能のゆえに沈黙させたまま、主人の価値観を流通させていくシステムである。

ヒエラルキーの最底辺にいる棄却され沈黙させられる黒人女の物語の中心に子殺し事件があるが、その事件は奴隷主の目から、インク(言語)、血、ミルクのメタファーを重複させながら、次のように値踏みされる。

返却を請求できるものは、何一つ残っていないことは、一目見れば、特に「先生」には、明白だった。…二人は目を開けたまま、おが屑の中ころがっていたし、三人目は、いちばん値の張る奴隷のドレスの上に、どくどくと血を噴き上げていた。この奴隷は「先生」がしきりに自慢していた女だった。肌理の細かいインクを作り、とびきり美味なスープをつくり、シャ

ツの襟のアイロンのかけ方は、こちらの望む通りだし、その上、いくら少なめに見積もっても、あと十年は生殖可能だった。だのに、目の前にいるのは、野生をむきだしにしている黒人女だった。(149,下,33-34)

黒人女の母の身体は、白人男性の私有財産を累加蓄積していく商品価値しか持たない、奴隷主からはセスの行為は「野生」に戻ったとしか見えない。監督下に置かないと「野生」をむきだしにするとの奴隷主側の認識的暴力とともに、次に問題にしたいことは黒人男が奴隷主の黒人女に対する見方を共有している部分がありはしないかという点である。マスター・ナラティヴがジェンダー関係を内包したままではないかという問題は、シッターが「ポールDのセスに対する所有欲の強い愛」<sup>26</sup>と呼んだものであるが、私は、ハーレの精神を破壊する元凶も、女を男の所有物とみなす見方であり、何を「一人前の男」として規定するのかという概念それ自体がはらむ問題にあったという観点からポールDとハーレが持つ課題の共通性を付け加えたいと思う。「バターと固まった牛乳を顔に塗りつけるなんて、人生でもなければ、生きる理由でもなかったから (125,上,241)」とハーレの男性性喪失を同情的に語るポールDに読者は共感するのであろうか。むしろ男女の関係が、黒人男性の性の女性化、強くたくましくあるべき男性性の無力化として、力とディスコースの関係性が書き込まれていくプロセスの中で、黒人男性の性の女性化という去勢体験よりも、もっと苛酷な運命を背負わざるを得ない黒人女の苦しみが、黒人男性の視野からは不可視になってしまうことのもどかしさではあるまいか。ガーナー氏が営むスイートホームが隠蔽する奴隷制の問題は、温情主義的な奴隷主の表面的には「一人前の男」として扱う態度が、奴隷制の残酷さを覆い隠し、御主人の価値観を内面化することで飼い慣らされる男たちの「男性性」概念それ自体なのである。あの「絵」の目撃場面から、行方不明のハーレに代わってスイートホーム最後の男として18年後にセスの前に現れるポールDの物語に、白人優位社会における黒人男性と黒人女性の関係性がはらむ問題が継承されることになる。

## (2)-2

ハーレの男性性喪失の原体験がミルクが凝固して出来たバターに象徴されているとすれば、ポールDの被抑圧体験は、語るに耐えない血も凍るような悲惨な記憶が「赤い心臓」を忘れて、身体的にも精神的にも感覚を麻痺させて「かぎタバコ入れ」の中にしまい込まれるとの比喻で指し示される。黒人

男性の語るに耐えない物語は、セスの語るに耐えない濃すぎる愛の物語と並置され、両方の物語の間に埋めがたいギャップが存在することが、例えばセスの背中にできた傷跡への解釈の差異となって露呈する。逃亡を試みた時に鞭打たれてできたセスの背中の傷跡は、黒人女性が背負わざるを得なかった苦しみを表す象形文字のような象徴であり、その記号は読み手によって様々な解釈を引き出すシニフィアンである。この記号は、白人女性のエイミーによって「これは木だ。ルウ。サクラの木だ。見てごらん、これがミキだ--赤くてスイカをぱかっと割ったみたいだ、汁がいっぱいたまっている。...おまえの背中には、木が丸ごと一本生えているんだよ。(79,上,155)」と読まれ、黒人男性のポールDからは「作品を人目に晒すのをいやがる、かたくなな鉄細工職人が彫り上げた、凝った装飾品のような背中(17,上,38)」と解読される。問題はセスの背中の傷跡は、白人男性の握る鞭によって刻印された場でありながら、その身体の持ち主には見えないまま、白人女性によって、黒人男性によって解読される記号であり続けていることへの示唆であろう。見ること、読むこと、書くこと、認識することの主体性を奪ったまま、黒人女性の身体性において再刻印されていく記号システムの危険を暗示してしまいか。「割れてしまって真っ赤な血」をしたたらせている背中を実際に見ているわけではなく、凝固して閉じられた後ちの記号の読み手として登場するポールDの認識の限界は、鞭打たれたときに流された「血」とともに「その上わたしのお乳を盗んだ(17,上,36-37)」と二度繰り返すセスの訴えに対して示す彼の反応の鈍さに現れている。「作品」であるかのようにセスの背中を見るポールDに、彼女はベビーサグスの口ぐせを思い出す。

男というものは、女たちに、背負っている重荷をいくらかでも自分たちに持たせてくれるようにと勧めはするが、女たちが軽くなった身の心地よさを味わう間もなく、彼らは女の傷あとや苦難をじろじろと点検する。それがすむと彼らは、この男がさっきやったと同じように振るまうのだ。女の産んだ子供たちを追い払い、女の家を壊すのだ。(22,上,46)

鉄細工の迷路を台所でやさしく迎ってくれたポールDのキスを、「じろじろ点検」されたかのように感じるセスの不安は、見られることの対象物として黒人女が審判を下されていることに対して表出したものである。「点検」をするときの物差しはどこにあるのであろうか。品定めをする側とされる側の関係性が黒人男女の間にも横たわることを暗示しながら、黒人女に背負わされ

た重荷は本当には理解されないまま、黒人男の被抑圧物語へとずれていくのである。権力構造の最下層にある黒人女の身体に加えられた直接的暴力の場面が、その目撃者である黒人男性に間接的に振るわれた暴力の効果として男性性喪失の物語にすり替えられていくように、ポールDの男性性喪失物語が重層的に重ね書きされていくことになる。

ポールDに一番こたえたことは、口にはめられたハミそれ自体でも、アルフレッドでの体験でもなく、「おれの姿をじいっと見てるおんどりどもの態度を見たことさ(71,上,140)」と彼の物語は始められる。ポールDの手助けがなければ殻から孵ることも出来なかった足の悪いおんどりが、少なくとも五十羽いためんどりを従えて、彼よりもずっと立派に自由な身の上をアピールするかのように王様然として、高見から見おろしてにたりと笑ったこと。おんどりとの比較で「陽を浴びて桶の上に坐ってるにわとりよりも取るに足りないもの(72,上,142-143)」とポールDに思わせている構図が、おんどりでさえ持っているめんどりを従わせる権利が剥奪されているという男性性喪失感、見る主体である権利が奪われて客体に成り下がった去勢体験として描写される。黒人男性の被抑圧体験の象徴は「ミスターの真紅のトサカのように赤く鮮やかな心臓(73,上,143)」として血の色が強調されつつ、その心臓が鼓動をやめて錆びつき蓋が閉じたままになった「刻みタバコの缶」の中に潜ませる物語として描写される。着目すべきは、黒人女の痛みは、黒人男性からは見えない無意識の層へと追いやられ、マスター・ナラティヴにすでに内蔵されているジェンダーの力関係を反復していくあり方である。

男性性喪失の原体験が失われた男性性を取り戻そうとの欲望をポールDの中に喚起するが、その男性性概念は女性の身体を所有物とみなす白人男性の判断の枠組みを踏襲した物差しによって計られたものではないのか。ビラヴィドに誘惑されてポールDは、「若い女の気の向くままに、時も所もおかまいなしに、拾い上げられたり放り出されたりしている布切れの人形(126,上,243)」のように成り下がり「わしは男じゃないんだ(128,上,248)」と感じる。自分の意志で自分の足、自分の性欲、自分の肉体を動かさない弱さが、力の無さとして去勢感覚を表出させる。「一人前の男」でなくなったという喪失感がポールDをしてセスに「子供を産んでほしいんだ、セス。わしのためにそうしてくれないか？(128,上,248)」と言わしむる場面を誘発するのであるが、男性性喪失感の体験は、男性の所有物である女の肉体に、自らの所有権の証として自分の子供を産ませる欲求に移し変えられる。スイートホームの最後の男、ポールDが取り戻そうとした男性性は、母の身体を男性性の力の発露

の場として把握し、家父長制的核家族のモデルにおける長であることの証明に女の肉体を子産みの道具のように認識する枠組みを超えていないのである。黒人女にとって、白人優位社会の中でのジェンダー関係は、黒人男性に保護を期待するものであるどころか、「心労から解放されない限り、母性愛は命取り(132,上,254)」になる不安と重荷をかかえるのであり、その不安定さは、ハーレがポールDに代わったからといって解消されるものではない。むしろ、白人男性に許されている男を長とする家父長制の核家族のモデルをそのまま黒人家族に当てはめようとしていることに問題の在処が探られなければならない。

黒人の母の肉体とその身体が作るミルクが、これ以上搾取の場として再刻印されないようにしていく可能性は、白人中産階級男性を中心化して一元化した枠組み(典型的に支配言語として示される)の外側の「知」を取り戻す作業が成されないうちはあり得ない。侵略と征服によって文化的他者を支配する作業は、被支配者が支配者の言語を使用し、その価値観の枠組みに基づいた「知」を内面化することによって、自らの啓示と自由な選択であるかのように変貌を遂げる。スイートホームの最後の男、ポールDが取り戻そうとした男性性は白人奴隷主が、「一人前の人間」として男性性を描いてみせたその枠内でなぞらえたモデルを反復している。セスの子殺しを人間になりきれない動物の本能まるだしの「野生」と刻印する「先生」の認識の枠組みが、真相を知ったポールDの言葉にも繰り返される。「あんたの足は二本だ、四本じゃない(165,下,62)」とセスを非難し、ポールDが彼女のもとを去っていくとき、彼が適応した「人間/動物」「文明/野生」の境界を線引きする基準としての物差しは、まさに先生の認識の模倣である。<sup>27</sup>

しかしながら、子殺し事件が象徴する次の場面は、コミュニティの憎悪を誘いながらも、母から生きている娘へと引き継がれていくミルクと血の混入物としてのインクを示唆する。

戻ってくると、セスが血で汚れた乳首を、赤ん坊の口に入れようとしているところだった。ベビーサッグスは、拳で力いっぱいテーブルを叩いて叫んだ。「汚れを取るんだ!おまえの軀を清めてからだよ!」二人はもつれ合って争った。愛する者の心を奪い合う恋敵同士のように、争った。各々が乳を飲む子供のために闘った。血だまりの中で滑って、ベビーサッグスの負けになった。その結果、デンヴァーは母親の乳といっしょに、姉の血を飲んだのだ。(152,下,38)

黒人女性のエクリチュールは、白人フェミニストが用いた「白いインクで書く」というメタファーに、必然的に混入する血のメタファーが重なり合っ  
て表出されている。セスが娘を殺害した時に流された血に象徴されるメタ  
ファーとは、奴隷の身分に拘束されてきた長い辛酸と苦汁の歴史から抜け出  
て、自由に到る道を模索しようとする黒人民族が背負った被抑圧の記憶を紡  
ぎ出す物語に混入する苦難のインクなのである。支配者の言語を内面化する  
ことが強要された歴史において、他者の言語も文化も既に破壊されてしまっ  
ている語りの現在の場から、被抑圧者の物語を語ろうとする行為自体にはら  
まれるフライデーのディレンマであると言ってもよいかもしれない。「自由/  
拘束」「安全/危険」の二項対立の枠組み自体が「自由の中に潜む危険」「拘  
束の中で保証された安全」として、その枠組みの境界が危ういものになるに  
つれ、「白いエクリチュールとしてのミルク」は、解放に向かうように見えた  
ものの中に混在した「危険な落とし穴として流された血」とともに調合され  
たエクリチュールとなってしまう。

名を持たなかったために「はいはいしてんの子ちゃん」と呼ばれていた娘  
を供養しようと、墓堀人の欲望は母の肉体と交換されてBelovedの七文字が  
刻印される。石工の欲望のはけ口として利用されつつ、その行為を見る息子  
の欲望の視線を誘いながら同時に怒りも喚起して、犠牲者であるはずの母の  
意識にはとても「語るに耐えない」ものとして、沈黙を強いながら、識字能  
力もままならなかった母親セスの身体を經由して刻まれたBelovedの七文  
字。母の身体で作られたインクは、このように盗まれたり、売られたりする  
おぞましい対象物として、真の犠牲者の自意識においても、それを見たり知っ  
たりする者の意識においてもアブジェクトされつつも、生存し続けるために  
必要な滋養分としてのミルクと被抑圧の象徴としての血を混入させてデン  
ヴァーに引き継がれていく。しかし、ミルクと血の混在によって示されたイ  
ンクが、征服者の言語を使用する以外に表現方法がもはやなく、黒人たちの  
中にも中産階級化する層が生じ、白人/黒人、男性/女性の単純な二項対立  
的な図式で被抑圧者グループを一元的に考えることはできなくなった現代に  
おいて、被支配者のルーツを歴史的に探ろうとする文化が抱えた困難な課題  
の象徴であるとするれば、モリソンの言語表現との格闘の二重性こそがそのエ  
クリチュールのイメージに読み込まれるべきであろう。

\*本稿は金沢大学英文学会年次大会(1996年11月9日)で口頭発表した論旨

をもとに加筆・修正したものである。

(注)

1. エレーヌ・シクスー、『メデューサの笑い』松本伊瑛子他編訳(東京：紀伊国屋書店、1993), pp. 293-294, 320, 334.
2. Toni Morrison, "Introduction: Friday on the Potomac," in *Race-ing Justice, Engendering Power: Essays on Anita Hill, Clarence Thomas, and the Construction of Social Reality*, ed. Toni Morrison, (New York: Pantheon Books, 1992), pp. xxiv-xxx.
3. Toni Morrison, *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination* (Picador, 1992), p. 8. 邦訳、『白さと想像力』(東京：朝日新聞社、1992), p. 28.
4. Toni Morrison, *Beloved* (A Plume Book, 1987), p. 5. 邦訳、吉田廸子『ビラブド』(東京：集英社、1990)、上、p. 14. 以下、テキストからの引用は本文中に括弧書きで示す。
5. Sandra Gilbert & Susan Gubar, *The Madwomen in the Attic* (New Haven & London: Yale U. P., 1979)、p. 3. 邦訳、山田晴子／藺田美和子、『屋根裏の狂女』(東京：朝日出版社、) p. 6. 等参照。
6. Luce Irigaray, *This Sex Which Is Not One* (Ithaca: Cornell U. P., 1985)、p. 24. 邦訳、棚沢直子『ひとつではない女の性』(東京：劉草書房、1987)、p. 24.
7. Ann Rosalind Jones, "Writing the Body: Toward an Understanding of *L'Écriture féminine*," in *The New Feminist Criticism* (New York: Virago Press, 1986), pp. 361-377. 邦訳、青山誠子『新フェミニズム批評』(東京：岩波書店、1990), pp. 383-412.
8. Susan Rubin Suleiman, "Writing and Motherhood," in *The (M)other Tongue: Essays in Feminist Psychoanalytic Interpretation* (Ithaca and London: Cornell U. P., 1985), p. 356. 他にも、Adrienne Rich, *Of Woman Born: Motherhood as Experience and Institution* (New York: W. W. Norton & Company, 1976), 邦訳、高橋茅香子『女から生まれる』(東京：晶文社、1990), Nancy Chodorow, *The Reproduction of Mothering: Psychoanalysis and the Sociology of Gender* (California: U. Of California P., 1978) 等参照。
9. Barbara Hill Rigney, *The Voices of Toni Morrison* (Columbus: Ohio State U. P., 1991), p. 11.
10. Hazel V. Carby, *Reconstructing Womanhood: The Emergence of the Afro-American Woman Novelist* (New York: Oxford U. P., 1987), pp. 24-25, 34.
11. Sander Gilman, "Black Bodies, White Bodies: Toward an Iconography of Female Sexuality in Late Nineteenth-Century Art, Medicine, and Literature," in "Race," *Writing and Difference* (Chicago: Univ. of Chicago P., 1985), pp. 223-261. Paula Giddings, "The Last Taboo," in *Unequal Sisters: A Multicultural Reader in U. S. Women's History* (New York & London, Routledge, 1994), pp. 560-570. 等を参照。

12. Clarence ThomasをAnita Hillがセクシュアルハラスメントで訴えた事件に象徴される黒人男女のディレンマを、モリソンは、御主人であるCrusoeの言語を内面化しなければならなかったFridayの比喻で説明した。黒人男性として歴史上二人目の最高裁判事の地位を手に入れる可能性を目前にしたトマスは、その地位に相応しい人格を持ち合わせていないとのアニタ・ヒルの非難をかわすために'high-tech lynching'という言葉を用いて、白人優位社会の中で黒人たちが辛酸を舐めてきた歴史の記憶を見当違いのコンテクストに持ち出すことで、黒人たちに人種的忠誠の重要性を訴え自己正当化しようとした。マスメディアをにぎわせたこの事件は、被抑圧者集団の歴史を白人／黒人の人種のみを一元的に捉えるのではなく、階級、ジェンダー、性的嗜好性などが交錯する差別要因を複層的に考察する現代的視点の重要性を問いかけることとなった。奴隷制は制度的には廃止され、1950年代に始まり60年代に最高潮に達したものの指導者の分裂とともに方向性を見失った公民権運動の後ち、単純には見えにくくなり複雑化していったにもかかわらず、根強く巧妙な形で続く差別の構造に対して、どのように対抗的文化、言説を構築していくのかという問いが黒人指導者層に課せられている。私見では、『ピラヴィド』における言語表象の複雑さと、歴史的に、幾重にも抑圧されてきたグループがどのように既存のシステムを乗り越えるのかという課題解決の現実的困難さの次元は呼応していると考えられる。

13. Deborah Ayer Sitter, "The Making of a Man: Dialogic Meaning in *Beloved*," in *African American Review*, vol. 26. No.1, (Spring, 1992), p. 23.

14. モイニハン・レポートの反論に関しては、ミシェル・ウォレス、邦訳矢島翠、『強き性、お前の名は』（東京：朝日新聞社、1982）、等参照。

15. Angela Y. Davis, *Women, Race & Class* (New York: Vintage Books, 1983), p. 13.

16. モリソン自身インタビューで次のように答えている。

「黒人の女性と白人の女性とでは、書くものに非常に大きな違いがあるように私には思えます。攻撃とか侵略は白人の女性にとって新しいものですが、黒人の女性にとっては目新しくありません。黒人の女性は巣と冒険とを結びつけられると思います。白人の女性のように、そこに矛盾は感じません。この二つはそれぞれ安全な港であり、船です。両方とも宿であり、航跡なのです。私たち黒人は両方とも受け入れます。私たちには二つの場所が、二つの役割が、互いに排除しあうものではありません。」〈*The Black Women Writers at Work* (Oldcastle Books, 1989), p. 122. ed. Claudia Tate, 邦訳、『黒人として女として作家として』（晶文社）p. 162.〉この発言は、白人女性にとって家庭が少なくとも、安全を保障する巣としての役割を果たしてきたジェンダー・イデオロギーによる女の位置づけが、黒人女性には当てはまらないことを明言するものである。「男性＝公的領域／女性＝家庭領域」の図式が、奴隷制下のコンテクストにおいて黒人男女には当てはまらないことは、他にも「養育する母親であり夫のための優しい連れ合いであり、主婦である女の役割を強調し、強化していこうとする19世紀の女性性イデオロギーによって判断されて、黒人女性は実際逸脱であった。...よくあることであるが、現実には神話の正反対であっ

- た。大多数の奴隷男と同様、奴隷女は野良作業員であった。」との指摘<Angela Y. Davis, *Women, Race & Class* (New York: Vintage Books, 1983, p. 5.)> など多数。
17. Phyllis R. Klotman, “Dick-And-Jane and the Shirley Temple Sensibility in *The Bluest Eye*” in *Black American Literature Forum*, 13: pp. 123-125. Shelley Wong, “Transgression as poesis in *The Bluest Eye*,” *Callaloo*, 13 (1990), p. 472. など参照。
  18. A Conversation with Toni Morrison, “The Language Must Not Sweat,” by Thomas LeClaeir, *New Republic*, 1981, March 21, p. 26.
  19. Homi Bhabha, *Location of Culture* (London & New York: Routledge, 1994), pp. 85-92.
  20. *Narrative of the Life of Frederic Douglass*, in *The Classic Slave Narratives* (A Mentor Book, 1987), ed. By Henry Louis Gates, Jr., pp. 289, 301. 邦訳、岡田誠一『数奇なる奴隷の半生：フレデリック・ダグラス自伝』（東京：法政大学出版会、1993年），pp. 88, 110.
  21. Carole Boyce Davies, “Mother Right/ Write Revisited: *Beloved* and *Dessa Rose* and the Construction of Motherhood in Black Women’s Fiction,” in *Narrating Mothers: Theorizing Maternal Subjectivities*, ed. Brenda O. Daly & Maureen T. Reddy (Knoxville: U. Of Tennessee P., 1991), p. 48.
  22. Toni Morrison, *The Bluest Eye* (Washington Square Press, 1970), p. 37. 邦訳、大社淑子『青い目がほしい』（東京：早川書房、1994），p. 50.
  23. モリソン自身、この場面を‘It is interesting to me that where I thought I would have the most difficulty subverting the language to a feminine mode, I had the least: connecting Cholly’s “rape by the whitemen to his own of his daughter. This most masculine act of aggression becomes feminized in my language, “passive,” and, I think, more accurately repellent when deprived of the male “glamor of shame” rape is (or once was) routinely given. <“Unspeakable Things Unspoken: The Afro-American Presence in American Literature,” in *Modern Critical Views: Toni Morrison* ed. Harold Bloom, (New York: Chelsea House Publishers, 1990), p. 220.> と説明しているし、Rigneyも、モリソンは“feminine language(32)”を用いて、伝統的な男性のレイプ空想（男性的力の行使）を覆していると指摘している。
  24. 例えば、Adrienne Rich, *Driving into the Wreck: Poems 1971-1972* (New York & London: W. W. Norton & Company, 1973), pp. 44-45. の“Rape”の詩を分析する作業を筆者は既に試みたので参照のこと。和泉邦子、「フェミニズムと言語表現」*New Perspective*, 155, (1992), pp. 26-34.
  25. Rigney, p. 25.
  26. Sitter, p. 18.
  27. *Beloved* の子殺しのテーマは、奴隷制の下では、白人に我が子を捧げるよりも自分の手で殺してしまうことを選ぶ黒人女が多くいたという史実に依拠したものであると Davies

は指摘している (p. 45)。また、モリソンが題材としてヒントを得たというマーガレット・ガーナー事件では < *The Black Book* (New York: Random House, 1974), ed. Middleton A. Harris, et. al., p. 10.>、子殺しに対する同情もわき起こったと説明している批評家もいる。 < Paul Gilroy, *The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness* (Cambridge: Harvard U. P., 1993), pp. 64-68.> このことは、モリソンが *Beloved* を執筆するにあたって、ポールDも含めてセスの行為が黒人コミュニティの中でも理解されずに村八分にされている状況の意味を問う物語へと史実を変更させていると言えよう。